



邑久長島大橋架橋30周年記念シンポジウム

「人間回復」の思いを未来に

— 過去、現在そして世界遺産へ —

報告書



撮影：写真家 西岳海氏

2019(平成31)年2月

岡山県瀬戸内市

邑久長島大橋架橋30周年記念事業実行委員会

この報告書は(福)ふれあい福祉協会「平成30年度ハンセン病対策促進事業」の助成を受けて作成しました。

報告書発行にあたって

邑久長島大橋架橋 30 周年記念シンポジウム報告書の発行にあたり、ご講演いただきました野の花診療所院長徳永進先生、リレートークにご登壇いただきました皆様、そして会場をご提供くださいましたゆめトピア長船関係者の皆様に改めて厚くお礼申し上げます。

今回のシンポジウムは参加を希望される皆様の事前予約を不要とし、いささかぶっつけ本番という綱渡りのような状態での開催の運びとなりました。しかしながら当日会場にはあふれんばかりの 350 名もの皆様にご来場いただき、主催者として感涙にむせる思いがいたしました。

「人間回復の橋」邑久長島大橋架橋後のこの 30 年は、本当に時の移り変わりが早く感じられます。今回のシンポジウムはその大きな歴史を振り返り、大きな前進の足跡を語り合うものになったと感じています。

シンポジウム開催後にはこれまで以上に多くの皆様に療養所を訪問いただき、ハンセン病問題への正しい理解への学習を深めていただいております。とりわけ地元瀬戸内市では小・中学校、邑久高等学校での取り組みが活発となり、市民による長島を語り継ぐサークルも誕生いたしました。シンポジウムは地元からの発信が増し、各地へとこの発信の輪が広がっていく大きな出発点になったと思います。

最後に、この発信の輪が昨年本格的に活動を開始した NPO 法人を中心にハンセン病療養所の世界遺産登録運動の推進に向けてより力強く発展していくことを祈念して発行のことばといたします。



収容棧橋を背に

2018 (平成 30) 年 10 月撮影

邑久長島大橋架橋30周年シンポジウム

「人間回復」の思いを未来に

－ 過去、現在そして世界遺産へ －

開催概要

- 趣 旨 2018（平成30）年は、1988（昭和63）年5月9日の「人間回復の橋」邑久長島大橋架橋から30年の節目の年であるが、長島両園（国立療養所長島愛生園及び邑久光明園）の入所者の平均年齢は85歳を超え、同時に架橋前のハンセン病問題と架橋運動を知る関係者にも高齢化の波が押し寄せている。
- そこで、邑久長島大橋という「橋」を通して架橋前と架橋運動、そしてこの30年間に長島両園に関わってきた関係者の実体験を聞き、ハンセン病問題の最終的な解決を目指すべく私たちはどう変わるべきなのか。一方で変えてはならないもの、語り継ぐべきものは何かを考え、世界遺産登録運動へ生かす契機とするシンポジウムを開催する。
- 日 時 2018（平成30）年9月1日（土）午後1時～4時10分
- 会 場 岡山県瀬戸内市保健福祉センターゆめトピア長船2階夢いっぱいホール
- 総合司会 岡山県立邑久高等学校生徒
- 参加者数 350名
- 内 容 (1)NPO 法人ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会
キャッチフレーズ及びロゴマークの発表・表彰
- (2)開会挨拶 実行委員会委員長 中尾 伸治 氏
- (3)基調講演 野の花診療所院長 徳永 進 氏
【演 題】川はありますか、山はありますか－学生時代に問われたこと－
- (4)リレートーク
【演 題】「隔離からの解放」を振り返る 草の根交流の歩みから
【司 会】国立療養所邑久光明園長 青木 美憲 氏
【登壇者】・NPO 法人むすびの家副理事長 柳川 義雄 氏
・長島愛生園入所者自治会事務局長 石田 雅男 氏
・邑久光明園入所者自治会副会長 山本 英郎 氏
・瀬戸内市裳掛地区コミュニティ協議会会長 服部 靖 氏
・岡山県立邑久高等学校3年 佐藤 朱里 さん
- (5)閉会挨拶 実行委員会副委員長 太田 由加利 氏
- 主 催 邑久長島大橋架橋30周年記念事業実行委員会
- 共 催 瀬戸内市
- 後 援 国立療養所長島愛生園、国立療養所邑久光明園、瀬戸内市教育委員会、RSK、朝日新聞岡山総局、山陽新聞社
- 協 力 岡山県立邑久高等学校（総合司会、会場整理）、（公社）岡山県聴覚障害者福祉協会（手話通訳）、せとうち要約筆記クラブ、せとうち難聴者の会（ヒアリンググループ）
- 撮 影 写真家 西 岳海 氏
- 実行委員会事務局
NPO 法人ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会事務局



総合司会

岡山県立邑久高等学校 3年 千葉 優希乃^{ゆきのの}さん
3年 森木 あかりさん



開会挨拶

(総合司会)

定刻となりました。ただ今から、「『人間回復』の思いを未来に～過去、現在そして世界遺産へ～邑久長島大橋架橋30周年記念シンポジウム」を開催いたします。

主催者を代表しまして、実行委員会委員長 長島愛生園入所者自治会会長 中尾伸治^{なかおしんじ}が開会のご挨拶を申し上げます。



(中尾実行委員長開会挨拶)

皆さんこんにちは。本日はお足元の悪い中、私たちの邑久長島大橋架橋30周年記念シンポジウムに参加いただきましてありがとうございます。

私たちのこの架橋運動というのは17年続けました後に達せられたものです。この橋を作るのに多くの方々、特に地元の方々に大変お世話になったということは周知の通りです。

このシンポジウムを開催するきっかけは、この度、NPO法人ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会が発足したことにあります。ひとつ大きな行事をやろうじゃないかということで、架橋30周年の節目の年であることからこのシンポジウムを開こうと実行委員会を組織し準備をして参りました。

本日、NPO法人のロゴマークとキャッチフレーズも出来上がり、先ほど皆様方の前でご披露した訳でございますけれども（詳細は27頁）、これから私たちが世界遺産登録に向けて運動をしていく中で、本日は邑久長島大橋が架かるまでの経緯を皆様方に知っていただけたらと思います。

本日の基調講演は、鳥取市の野の花診療所院長徳永進先生から「川はありますか、山はありますか - 学生時代に問われたこと -」という題でお話いただきます。これは、徳永先生が鳥取県出身の入所者に一人ずつ話を聞かれまして、ふるさとに帰れない人たちが先生にそういう問いかけをしたということから先生が付けられたと思います。

また、続けて行きます「隔離からの解放」と題したリレートークは、邑久光明園の青木先生に司会を務めていただきます。その内容は、橋のかかる前、FIWC関西委員会の方々^{みなさん}が長島に來られて奉仕をして下さったというものも含まれると思います。療養所入所者がふるさとに帰った時に泊まる所がないということで、「交流の家」という施設を作るという大きな事業を行っていただきました。奈良市内の一画にその施設が現在もございますけれど、そういう運動をしていただいたお話、それから、それ以後に私たちとのかかわりの中で入所者の中からその奉仕に参加した人が現れ、それ以後に邑久長島大橋を架ける運動をしようということが持ち上がった、そのような話が出てくると思います。

また、私たちは昔から裳掛地区、地元の方々にも色々とお世話になりまして、今回初めて裳掛地区コミュニティ協議会の服部様が本日その一端をお話くださるということでございます。

更に、今回非常に嬉しいこととございますけれども地元の邑久高校の皆さん方が司会進行や会場の整理など色んなことに携わってくださっています。私たちの行事の中で地元の高校の皆さんがこうい

う形で参加して下さったことも今回が初めてです。

もちろん、邑久高校と愛生園とは深い関わりがございます。1955（昭和 30）年に邑久高等学校^{にいらいだ}新良田教室が愛生園の中に出来ました。そのときから邑久高校とのつながりがあり、それぞれ交流もしていたという歴史がございますので、本日お話をさせていただければ幸いですと思います。

1982（昭和 57）年頃からは、橋がないのなら心の架け橋になろうと奈良の有志の方々が「架け橋奈良長島を結ぶ会」を結成して、私たちのところへ再々出向いてくれました。この方々とは現在も交流が続いております。そういう中で架橋が実現したということもあります。

橋が架かった日、晴れ晴れと邑久高校のプラスバンドを先頭に橋を渡り始めたテレビの映像を見た私の母親から「元気な姿を見て嬉しかったぞ」という電話がありました。今から 30 年前の話です。架橋 30 年周年にあたり本年 5 月 9 日に記念の行事をしましたが、その写真が載った新聞記事を見て、今度は 70 年ぶりに三重の姪から葉書が届きました。人が渡るだけの橋ではなく、絆でつながった橋には大きな意義があると思っております。

本日は皆さんとともにこれからの新たな橋の活躍を祈念するとともに、これまでの皆さんのご協力に改めて感謝申し上げます。また、本日の会場の準備に携わって下さった皆さんのご協力にも感謝いたしまして開会のあいさつとさせていただきます。

本日はご参加いただき、誠にありがとうございます。

基調講演

川はありますか、山はありますか - 学生時代に問われたこと -



[講師プロフィール]

野の花診療所院長 徳永 進 氏 ^{とくながすすむ}

1948（昭和 23）年、鳥取県生まれ。京都大学医学部卒。京都、大阪の病院・診療所を経て鳥取赤十字病院内科医を務めた後、2001（平成 13）年 12 月に鳥取市内にてホスピスケアのある有床診療所「野の花診療所」を開設。1982（昭和 57）年「死の中の笑み」で第 4 回講談社ノンフィクション賞を受賞。1992（平成 4）年、独自の信念で地域医療をしている人に送られる第 1 回若月賞を受賞。

主な著書は鳥取県出身のハンセン病療養所入所者からの聞き書きをまとめた「隔離」（ゆみる出版）や、「野の花ホスピスだより」（新潮社）、「どちらであっても」（岩波書店）、「詩と死を結ぶもの」（朝日新書 谷川俊太郎さんとの共著）など。

ハンセン病との出会い

今日は邑久長島大橋架橋 30 周年の会に呼んでいただきありがとうございます。私には、ちょっと荷の大きい仕事ですけれども自分の中でのハンセン病との出会いとかこの数日間考えてきたこと、頭の中を巡ったことを話させていただきたいと思います。

ハンセン病ということばとの出会いは高校 3 年生のときの国語の授業でした。耳の遠い大きな声で話す国語の先生がなぜその短歌を紹介したのか分からないのですけれども、受験校ですからあまり人の心の問題とか、社会の差別の問題とかを語ることなく、点数さえとってみんなどこかの大学に入ってくれみたいな学校だったのに、その国語の授業で先生はこう一つの短歌を紹介したんですね。

幼くて 癩病む謂れ 問ひ詰めて 母を泣かせし 夜の天の河

「盆踊りかなんかあったんでしょうね。夜店かなんかあるんでしょうね。そこで、その子、行こうとするとお母さんが『いけん。お前は病気だからそこ行ったらいけん！』って言ったんでしょうね。『何でそんな病気になったんだ！何で行ったらいけんのだっ！』て、その子は言ったんでしょうね・・・」
て言うんですね。

だいたい受験用の頭になっている。その時、ぼくの心が動いたんですね。「なんてことだ」って思ったんです。体も反応したんです。その短歌がすうっと心の中に入ったんです。人間の社会の中でこんな悲しいことってあるんだ。そういう悲しみを受けて生きている人ってあるんだってことをそのとき授業で、一つの短歌で教えられたんです。

それはそれで終わりなんですよ。すぐ忘れるんですね。

京都で浪人して医学部に受かったんですね。京都市左京区北白川西町80の7だったかな。新しく出来た下宿に入ったんです。農学部の近くでした。そこには5人、2階に4人居て下1人いたんですけど。時代は学園紛争がすごい頃でした。京大はタテカンがありまして。今回なくなりましたけど。惜しい気がしましたけれど。タテカンが沢山ある時、反体制運動が勃発している時、大学はバリケード封鎖で授業がない、何してもいいって時代だったんですね。

反体制運動だからまとめて反体制をやればいいのに、そんな訳に行かずに赤軍派がある、革マル派がある、中核派がある、社学同がある、民青があるというところが違うのかよう分からんけど、みなヘルメット被って棒を持つ時代で、私も授業がなくなるからデモなんか参加してちょっと開放的な気分になった。ガート殴ったりすると血が出て痛そうな学生も居たんですね。

ある派に所属している下宿の1階の彼に、夜になると下宿ではそういうことは置いて一段落でラーメンなんか食べて。一応下宿仲間ですんで「革命ってなんかいいかも分からんけど棍棒で殴ったりして血が出るって痛いんじゃないの？痛いことはやめたほうがいいんじゃないの？」って言うのと「徳永君、君は鳥取から来て僕は高校時代から学生運動やってるんだけど」みたいな人で。「革命なんだよ。労働者中心の社会を作らないと資本家の社会じゃいけないんだよ。マルクスやレーニン、君、読んだらどうだかね」って言われて。時代はそういう雰囲気だったんです。

そう言われつつも私は殴られて血が出て痛いことは避けたほうがいいんじゃないかという事は覆さなかったんですね。そう偉そうに反論するわけじゃないんですけども。

所属は演劇部に入ってたんです。ベケットの「ゴドーを待ちながら」というような、不条理演劇ってまあ、訳の分からんことを考えるのが好きな時代でした。そこに入っていて、役者にもなれず広告とりやとったんですが。下宿の矢部さんっていう先輩が「ハンセン病っていうの知ってるかい？君、医学部だろう」って言うんです。ちょっと高校時代のその歌がちらっとかすめたんですが根本的に知らなかったんですね。「ハンセン病の社会復帰回復者のための家を奈良に建ててるんだ。よかったら来てみない？」って言われたんですけど、すぐには行かなかったんです。矢部さんは本にも書かしてもらったんですけど、日曜日遅く帰ってきておトイレしてパターンと寝るんです。同志社大学のコミュニケーション論新聞学研究か何かやってたんですね。パターンと寝る前のおトイレへその後私が入ると、便器が赤っぼいんです。それぐらい疲れて何かしてるということは分かるんですよ。で、1回行ってみようと思ってある時、行ったんです。

本当に学生が、ブロックを積んで労働者みたいにやってるんですよ。「ハンセン病社会復帰のための家を立てている！」と。びっくりしました。一輪車で砂を運んだりするんで、こんな簡単だと思ってやってみるとバランスが崩れて、ひっくり返るみたいな。結構難しいんだな。「徳永君、あの便所の肥を畑にまいて」とか言われました。そういえば田舎のお百姓さんが、前後に桶で肥を汲んでやってたなと思って「これぐらいできるわ」と思ってやってたんですよ。そしたら、ちょっと坂があるところでバランス崩して。その桶がバツァと、体にかかったんです。ただそのときの感覚は、ひどいとか臭いとかじゃなかったんです。うわあ！こんな暖かいものに包まれたのは初めて！これ以上汚くなることはないというものすごい安心感があったんですね。不思議なもんですね。でも人には言われませんか。ちょっと外である程度流したあと、そおと、「交流の家」の中に入って人に見つからないように、ダアッて水かぶったんですね。その時です。「生きている！」と思ったんです。忘れてたんです。自分が生きてるってことを！

「1のベクトルと2のベクトル」「優しい心」

それで、きょう話そうと思ったのは「1のベクトルと2のベクトル」という話です。

もう一つは、「優しい心」ってことです。「優しい心」って言う言い方はちょっと違うんですけども「子どもの心」でもいいと思ったし「原始の心」、あるいは「素朴な心」でもいいし「簡素な心」でもいいと思ったんですけど、高校時代あの短歌を聞いた時に情が動いた。ああいう心のことです。それを一応「子どもの心」「優しい心」としたんですけども。人間って感情を持ってるんですね。身体ももちろん持ってますけど。自分がどういう感情出すかっていうのはその場にならないと分からない。色んな心があるんですね。全部が「優しい心」じゃないわけです。嫉妬する心、憎しむ心、争う心、人を追いやる心、でも手を差し伸べようとする心、崇める心、祈る心・・・心って色んなものを持ってるんですね。その場にならないとどんな心が出るかわからないんです。心の反対が理性とか、あるいは知恵とか。大人が持つようになる「ずる賢いもの」。あるいは、「政治的裏表のある心」。色んな心を持っていく訳ですね。ですので、なんていうことを言ったらいいかなと思ったんですけど私たちが忘れをかけている「子どもの心」です。おかしいもんですね。赤ちゃんとして生まれて育っていく子どもが、きれいとか、かわいいとか、痛いとか、困ったとか、色んな心を持っていくわけですよ。その中にある「素朴な心」、それを「原始の心」と言ってみようかな、「原初」がいいかなと思ったりして、結局なんか名前を付けそびれて「優しい心」にしたんですけども。



1 「1のベクトルと2のベクトル」

2 「優しい心」

今日話すのはそのことなんです

「交流の家」を建設していたFIWC 関西委員会というグループのスローガンは、「言葉より行動を」「人間皆兄弟」「よりよい社会の建設を目指して」の三つなんです。すごい分かりやすかったんです。棍棒で人を殴らんでも済むと思ったんですね。

そのグループは、労働すると休憩時間があって、お茶を飲むと歌を歌うんです。それでまたお昼ご飯で、食べると歌を歌って。夜になるとですね、ディスカッションっていったって意外と難しい話をするんですね。

ある時、関西の囲碁将棋クラブの学生たちと療養所にいらっしゃる皆さんで囲碁将棋部があって、一緒に大会をやることになったんですね。どうやって集めてくのか分からないんですけども、FIWC 関西委員会はちゃんと療養所の囲碁将棋部の複数人数を交流の家にまで運れて来ているんですよ。あのグループは意外と人集めがうまいんで、学生たちも集められて試合になるわけです。

学生はパチッ！とまあ打つわけですね。大学生ですからね。結構頭いいんですよ。そういうと、なんか島の人の方が頭悪いみたいに聞こえるかもしれませんが、学歴からすると絶対学生が上なんです。島の人たちは学歴って何のこと？みたいで。学生がパチン！と打つと、療養所の人たちは指が障害を受けておられますし、欠損してますからスプーンを持ってスプーンで、コロッと碁石を打つわけです。

学生はパッチン！って打つんです。と療養所の人たちはスプーンでコロッと打つわけです。学歴で圧倒的な学生が勝つかと思いや、結果は島から来た人たちが勝つ。学生は何で負けるのかな。学歴上なのに、って言ってないんですけども、それが面白くてですね。私も後で思ったんだけど、それは練習時間が違うわと。島の人、暇なんですよ。ああ、こんなこと言っちゃあいけん。誤解を招く発言が出ました。

でも、それ無理に出さんようにするほうがおかしいんで、とりあえず出したらいいんです。出した後、修正しながら。今の時代すごく過緊張になってですね。これ言ったら差別だと。差別的なことはもちろん避けないといけないけど、過緊張になると結局、心が通じないっていう偽装平等社会になってるんですよ。この偽装をどうやって脱出するかっていうことが大問題だけでも。メディアもですけども。もう敏感になっているだけで、何か心の底は流れなくていい。表層だけお友達っぽいことしようみたいな社会を作ろうとしてるわけですよ。不満がありますね。こんな社会はろくな社会にはなら

ない。マニュアルどおりに動いて。戦って勝ったら勝ちみたいに。負けたらそれがいけないののような。そんなことはないですよ。本当のところっていうのを見そびれて偽装で動こうとする社会にどんどんなっていくわけですね。話が変な方に飛んで行きましたね。そういう時は聞かんといてください。独り言、言わしてください。

権さんからの問いかけ

お返しにというのはおかしいんですが、長島愛生園に行くことになったんです。どう思ったかっていうと、「行かねばならぬ使命感」みたいなものを感じてたんです。誰もそんなもの望んでないのに。でもそこは隔離の島ですよ。20歳ぐらいの時ですね。年齢は言いませんけど今から50年前のことです。

国鉄赤穂線姫路駅のプラットホームでそば食わしてもらってですね。駅そばというやつ。それで日生駅で降りると、だんだん何気に緊張するんですよ。緊張しないふりしながら。歩いて行って日生港があって、そこに「森丸」っていう木の船があって、それには患者さんも職員さんも乗る。「患者さん」と言う言い方何回も出るんですけど、あの頃は患者さんだったんです。今は入所者さんですね。当時の話なので、そのまま言いますけどね。

そして、私たちみたいなものもいる。「森丸」のおつつあんが「はあああいつ」って。その人は全然差別感がない人なんです・・・のように見える。

雨の時は中に入らんですけど、小1時間で島が見えるんですよ。緊張しました。これが隔離の島かって。降りました。降りて案内されたんですね。ここ、昔監房があった所。ここ納骨堂とか。ここ焼き場みたいな。ここ独身舎、ここ夫婦舎。うんうんと、差別感のないような顔して、うんうんと聞いている。うわあ、凄いとこだと思いましたね。

患者さんたちはその頃まだ包帯されてる方もおられましたし、後遺症ももちろん大きかったんです強かったけど普通に歩いておられました。すごい後遺症だと思いましたね。大変だったなあ、という感じでしたね。その人生がすごい、と思いました。

先の「子どもの心」というのが反応しているわけです。私たちは素朴に「差別はいけない。人間皆兄弟」って思っていました。

そうして愛生園で色んな人に会う訳です。「交流の家」を一緒に建てた石田さんもその時、来ておられたようですし、その中で何人もの人たちがみんな友達になるわけです。権さんっていう人もいました。

権さんは子ども時にハンセン病になって、親がちょっと別のところに家を建てる。子どもって意外に残酷ですね、ほかの子たちは小屋に石を投げるわけです。居ても立ってもおられず、権さんは子どもの時に長島に収容されるわけです。

その頃、社会復帰運動が盛んになっているところでしてですね。昭和で言うと42、3年でしょかね。そして、権さんも運動靴の新しいのを履いて、ちょっとブカブカでしたけど社会に出るわけです。赤穂なのか相生なのか分かりませんが、岡山じゃなかったようなんですけど。そして一緒に作業するんですけども、手が不自由で同じように働けないわけです。そして何気なくやっぱり疎まれるんですね。自分の島以外に寝る所は無いわけですので、島に帰ってくるわけです。そして言うんですよ。「結局、差別はのうならへん！こんな隔離の島なんかな、赤い火の玉が落ちて、みんな木っ端微塵に無くなったらいいんだ！」って。びっくりしましたね、その言い方に。そして私たちに向かって「学生の言うことは信じられんけな！どうせ若い時だけ、こんな何だか慈善みたいな格好してきて、結局就職して家庭持って、結婚し幸せな家庭！それだけだろお！」って。

そこまで言われますと、これはこれで気持ちがいいんですよ。見抜かれてるっていうことだったんです。やっぱり、偽善でないことっていうのは大事だと知りました。

私たちはその頃から患者さんのお宅も自由に訪問します。療養所の庶務課は患者宅で寝てはいけない、食べてはいけないと厳しく言ってたけども、そのころは菌非排出者の人がほとんどでしたし。感染はまずなかったし、職員で感染してる人は全国でなかったということを知ってましたし。キャンパ

一の先輩には患者さんの膿を舐めた、みたいな武勇伝があってですね。そこまではできなかったけども。ともに泊まったりは良いと思って、権さんの隣の部屋に泊まったんですよ。差別は良くないと思ってました。

夢中で権さんが鳥になって出てきてですね。ヒューって飛びながら、「徳永君、人間は平等かね？」って聞くんですよ。ペロッと頬をその鳥が舐めるんです。「平等です！でも舐めるのはやめてください！」

「差別は良くないと思うかね？」ってお尻を舐めるんです。「差別はいけません！でも舐めるのはやめてください！」

「指がなかった人間じゃないか？」と。「いえ人間です！」。あちこち舐めるんですね。

「義足だったら、目が見えなかったら人間じゃないかい？」って。「親類から、故郷の人から嫌われてたら人間じゃないかい？」って。「人間です！人間です！」ってぼくは答えるんです。

最後に「じゃあ徳永君！君の人間の定義、人間の定義は何だ、言ってみろ！」って言われて目が覚めたんですよ。

私は、ドキドキドキしてるんです。夢かあと思ったんですね。何だあ俺も大したことないなあ、怯えてるじゃん、と思ったんですよ。それまで大したもんだと思ってたんですよ、きっと。いや思っていないけど、怯えてるって言うことが恥ずかしかったですね。どっかで怖がってた。夢だったけれども、夢も何かを伝えてると思いましたね。

「人間の定義、何だ言ってみろ！」って言われて、答えられなかったんですが、後々、考えましたね。後々考えたら分かったかって言ったら、後々考えても分からないですけど。一つ、肌が温かい。二つ、人を殺さない。三つ、困ってる人に手を差し伸べる。四つ、静かに死んでいく。五つ、・・・色々思うんですけどね。「人間の定義かあ」みたいなことで、いまだに時々問われるんです。

ほかにも色んな人がいらっしゃるということをキャンパーも教えてくれ、会うわけですね。

療養所入所者のことば

島田等っていう人に会ったんです。島田等さんは詩を書いている人だったんです。

その人が「らい詩人集団」っていう、これはですね、1964（昭和39）年に創設してます。「らい」という同人誌を発行します。創刊号があって、「宣言」というのが書いてあったんです。

一つ、私たちは詩によって自己のらい体験を追求し、また、詩をつうじて他者のらい体験を自己の課題とする人々を結集する。

一つ、私たちは私たちの詩がらいとの対決において不十分であり、無力でもあったことを認める・・・みたいなことがあって、これ創刊号です。なんでここにあるかっていうと、「不良品」と書いてあって、要らんのが残ったんですよ。これ、まだ大事に持ってるんです。

ハンセン病の人は強制収容されました。空を見上げることなく、下を見、肩をすぼめ生きておられると勝手に思っていました。そうではありませんでした。その中にいる人たちは色んな人があり、らいと闘うということ、社会の差別と闘うと既に言ってる人たちが居たんです。さすがだあと思いましたですね。その中の1人、同人の1人に笹雄二さんがいたんです。

笹さんは草津の楽泉園の方で、らい予防法廃止の時、あるいは国賠訴訟の時の1人の闘士になった人ですけども、彼も「らい」に詩を書いているんです。やっぱり詩人なんですね。彼の書いた「わすれられた命の詩」という本、名著ですね。家族ぐるみでこの病気を抱えながら悪戦苦闘するのが書かれてるんですけど。彼がですね、東京のシンポジウムで話をされますけれども国賠訴訟に勝訴した時か何かの時の感想です。「国家に勝っても、勝った気がせん」。素晴らしいと思いましたね。国家に勝っても勝った気がせん。じゃ何に勝ったら、笹さん勝ったと思ったろうと考えさせられますが。

先ほどの島田等さんはこう言いました。「徳永さん、なぜこの強制隔離、終生収容が続いていると思いますか」って。もうその時で既に30年、40年、50年位は経っている。続いている。私は、うーん・・・と考えました。やっぱり一つの大きな権力の中で・・・いうふうに思いましたね。と、島田さんは「も

う一つある」って言うんですよ。それは私は分かりませんでした。彼が言ったのはこうでした。「国家権力が一つ目とすると二つ目は国民の無関心です」って言ったんです。ハッと思いましたね。「この二つによってハンセン病の強制隔離、終生収容は今も続いているんです」。私、光田健輔って最初私答えたんですけど「光田健輔に代表される国家権力を1とすると、2の国民の無関心。この1と2によって続いている」と言ったんです。で、うなったんです。国民の無関心という言葉に気がつかなかった自分にですね。島田さんは、「まあ、無らい県運動。鳥取も頑張っておりましたよ」みたいなことを言って。



後日ですけど、私は鳥取県の無らい県運動っていうの記録がちゃんとあって、それは1938（昭和13）年、ハンセン病の人を長島へ送ろうという運動が起こった時です。それで光田健輔も鳥取へ来ますし、厚生省からも来るし、立田鳥取県知事が来る。その決起集会があったときですね。103名の方が鳥取から送られていくんですけども。立田寮を建てて、その人たちの住む住宅も提供しよう。何に驚いたかっていうと、エイエイオーみたいな大会なんですよ。ハンセン病の人を強制収容しようっていう。それもそういう言い方ではなく、「困ってる患者さんたちに救いの場を提供しなければならないのではないかっていう。物事って言いようですね。それに参加した人達、それは知事、県議会議長、医師会長、警察署長、歯科医師会長、産婆会の会長。それから、婦人会長、鳥取市長、郡の町長、などなどです。郷土をあげて全員が送ろうとしたんです。逆らえる人はありませんでした。

そして、収容がなるべく目立たない時間に、夜中から朝にかけて行われたんですね。この無らい県運動っていうのが一つのベクトルです。そのことを私は先ほど「1のベクトル」と呼んだんですね。

島田さんが随分前だけど言ったこと、もう一つありました。「徳永さん。私たちは2025年、消滅します。でも隔離収容していただいた感謝の印に愛生園では老人の施設を、多摩全生園では森を残そうと思ってます」。その言い方にびっくりしました。恨み辛みの結果としてではなく、「感謝の印に」って言ったんです。感謝かっと思ひましてね。

島には色んな人たちがいらっしゃいました。青い鳥楽団、失明された人たちのハーモニカ楽団。近藤宏一さんはみんなが不自由になっても曲と一緒に吹こうと言ってハーモニカの楽団を作られたんですね。楽譜はみんな失明されてるから眼では読めない。点字かっっていうと、指は欠損されてたり障害があります。麻痺がありますから読めない。結局、舌です。舌読で楽譜をみんな覚えながら、「月の砂漠を〜♪」とかいう曲を浜辺に流すんですね。その近藤さんの言葉です。「仏教の中にある言葉です。『耳で見、目で聞く』 そうだこれだ！と思わず私は膝を打ちました」って言われました。私は虚を突かれました。

失っても、失っても

また、藤本としさんという女性もおられました。外島保養院から邑久光明園へ移った人でした。だんだんと障害が強くなって失明されたおばあさんです。外に出ることもなく、韓国人のおばあさんと2人住まいをしてたんですね。ある時、韓国人のおばあさんが「としさん、あんたは字が読めるだろう。手紙が息子から来るけど読めんだが。重箱の真ん中に箸を渡して、その箸の上と下におはぎを置いたような字がよく出てくるんだが、なんて読むんだ、としさん？」って聞く。としさん「えっ、重箱の真ん中に箸を？ あっ、母！母よ」って。「お母さん元気ですか。いつもお母さんのことを思っています。分かった！また字を教えて」って言って、韓国人のおばあさんは目の見えないとしさんから字を学ぶですね。

ある時、鐘突き堂に上がろうと言われて、としさんは今までは行かんと言ってたのに、行くんですね。そしたら韓国人のおばあさんから「ここからはねえ、としさん。杖を捨てて膝と肘を使ってはっ

ていくんだよ。あらら。としさんのほうが速いが！待って！」とおばあさんが言う。鐘突き堂に上がると風が頬をさすっていく、空を飛ぶ鳥の鳴き声が聞こえる。「自然っていいなあ」と思った、ってとしさんは言うんです。

ある時、杖をついて歩いていると杖と杖が当たったんですね。先方も盲人。「森田ですっ」と男の子が言う声が聞こえた。森田君ってあの森田君？子どもの時からこの病気で、最初から失明してる。「私ね、森田君に会ったら聞きたいことがあったの。森田君、子どもの時から目が見えなかったから、色っていうものは何も知らんの」。森田君は「う～ん。めくらは真っ黒っていうから、いつも見とる色が黒だろやっ」というんです。それにドキッとしたんですね、としさんは。森田君にとっては海も山も花も人も黒。トマトも黒。私の思い出の中には様々な色がある。自分だけが一番不幸だと思って生きるのやめようと思ったって、言うんです。自分の中に残ってる可能性をえぐり出すようにして生きようと思った、って。凄いと思ったんです。失っても、失っても、可能性を求めて生きていくという世界があるということをお教えられました。

同郷の人たちとベクトルの行方



愛生園で鳥取の人がいらっしゃるよ、ということで鳥取県出身の人に会いました。「徳永さん。あんたがしゃべる鳥取弁で、ごっつい懐かしいなあ。何でもええけえ鳥取弁でしゃべってみてえな」。普通にしゃべっている言葉だけでも、きつとめっちゃ懐かしかったんでしょうね。

「徳永さん、倉吉の天神川はあるかな。流れとるかな？」「断水になったと聞いてないけ、流れとるでしょうやあ」。

「大山まだありますか？」って聞くんです。「え～と、山崩れなつたと聞いてねえけえ、ありましようや」。

「鳥取砂丘あるかな？」「それはあります。行きました」。

「日本海はあるかな？」「うんうん。それも見ました。ありました」。

「八頭郡の船岡の何とか神社の大きな楠、あれあるかな？」「その神社知りませんわ」。

質問がシンプル。そんなこと、よう聞くんなあとと思うことを聞かれてドキッとしたんです。

那須さんという人は、大山の近くに故郷があったんです。そして邑久長島大橋がない時ですからね。本渡まで泳ぐんですよ。捕まると監房に入れられる。ある時成功して、向こうの陸まで上がる。そこから大山の村まで行って自分の家に帰った時でした。「おかあつ、帰って来た！」と言ったときのお母さんの言葉。「何しに帰って来た！おまえがこの病気になって、みんな辛い思いをしている。葬式餞頭を出してお前は死んだことになつとる。お母さんとしてはな、こんな病気にならずにお前が戦地に行って天皇陛下万歳！て言つて銃で撃たれて死んでくれたら名誉のことだつたと思つたのに！もう二度と帰ってきたらいけん！」って言われたんです。

母にこんだけ残酷な言葉を言わしたのは何かって思いましたが、もう那須さん二度と故郷に帰ることはありませんでした。

ポロ買いの金さんという方がおられました。韓国の人でした。炭鉱で働いていたけど、気管支拡張症になって帰った。でもやっぱり韓国では暮らせんというので、下関から鈍行列車で鳥取県の中中部で降りた。そして廃品回収をやっていた。子どもさんは3人生まれた。そして、この病気になった。そして、避病院に入院した。避病院は古かったので新しいのに建て直すことになった。日本の人はみんなそっちに移ったのに、韓国人の2人だけは、「これっ」て材料渡されて、「橋の下にバラックを建てろ！」と言われて建てた。雨漏りがしますし、雪の朝は枕元に雪が積もる。私がこの病気だということも分かって、子どもはそりゃ病気の子っていじめられるし。修学旅行に行くお金がないのを材木屋さんが出してくれて行けたですけど。これ以上おつたらもうみんなの迷惑になると思つて。廃品回収の新聞で長島愛生園ができるみたいなことが書いてあつたんで、それを切つて役場に持つて行って、

ここにわしを収容してくださいって言ったですって。そして、島に来たって金さんはいうんです。

療養所内で労働すると少ない労働賃が支払われていて、金さんが働いた時には一日で富貴煙というたばこ2個分もらえたんだそうです。1個は自分のたばこにして、もう1個分を貯金して1カ月に1回あのバラックの家送到了っていうんですね。長男はその後成長して広島で廃品回収業として成功し、次男も廃品回収業として岡山で成功した。下の子だけは病気になってからできた子なもんで愛生園来た時には足をつねって痛いって言って、病気になっていないと思って安心した。

「これ、長男の結婚式の写真です。こっちは次男」って見せてくれるんです。親戚の人が写ってるんですが金さんは写ってない。金さんなんでみんなに理解してもらって、いっしょにこの写真に写ったらいいのに、写ってない。「ああ〜っ！そんなことしたらみんなの幸せが壊れる。わしは死んだことなるとるんです。わしが死んだことなると、みんなの幸せは保たれる。それでいいです。徳永さん、これ梨。食べなさい」って。梨ってこっちが専門なんです、20世紀。鳥取県庁から送ってくるんですね。

県はそのころ、正月とかそういう季節の時に県の特産品を、ふるさと納税じゃないんですけど送っておったですね。山本肇さんの俳句を思い出しますんですけど。鳥取出身の人ですけど、餅が送られてきた。三重県と島根県と兵庫県、餅の色が違ったんです。

白さの違ふ 故郷の餅焼く 同室者

山本肇さんの絶句はこうです。

骨堂の しだれ紅梅 見たきかな

みんなで納骨堂の道を掃除してしだれ桜としだれ紅梅を交互に植えた。どうせ死んでも故郷には帰れん。だったら自分が入る骨堂のしだれ紅梅見たいなあっていうのが山本肇さんの絶句だったです。

島田等さんもこう言いましたね。「自分の骨は一つは納骨堂に、一つは故郷の三重の方に向かう海に流してほしい」。友人たちはそうされたそうです。私は、きょうのテーマにはあえてできなかったんですけど、骨堂っていうのが一つのキーワードみたいな気がするんですね。残すべきものの1番大事なところに位置するものが骨堂かもしれないっていうような気がしたんです。

故郷って何だろうと思いました。私は大学が京都でしたから夜10時発の夜行列車に乗って朝5時前ぐらいに鳥取に着くんですよ。懐かしい故郷なんです。ちょうどその夜中にですね、故郷から岡山に行く貨物列車があったということですね。お召し列車。私がこう帰っている時にそこを出て行く人がいて。それは、故郷の人が押し出しているような感じがあったんです。そういう「1のベクトル」ってさっき言うものですけど、そういうものがあつた。私たちが考えなければいけないのは、今はもう「1のベクトル」はないんです。療養所へ収容する力はなくなってます。なくなってるんだけど、なくなったままでいいかっていうことなんですね。そして考えたのが「2のベクトル」っていうものでした。それは療養所っていうところから、別に自分の生まれ故郷でないといけないということはないんですけど一応代表として「故郷への力」です。それを「2のベクトル」とつけたんです。その「2のベクトル」はどのようにして、作られ得るのだろうか。それは決して大きなものでないといけないということではありません。邑久長島大橋架橋でないといけないというものではありません。世界遺産でないといけないというものではありません。小さなものでもいいかもしれないです。交流っていうことを考えると。小さな流れであつていいかもしれない。里帰りというのもありました。啓発ということでお互いが行ったり来たりするっていうことでもいいのかもしれない。でも考えるべきは「2のベクトル」なんです。理由は「1のベクトル」が猛烈に凄かったからです。それは光田健輔に代表される国家権力と国民の無関心によって圧倒的な力を持って存在した力なんです。それに抵抗する「2のベクトル」は難しいんですが、でも問われているのは「2のベクトル」なんです。どのような形でもいい「2のベクトル」は問われていると思ったんですね。

もう一つ思い出しますのは、鳥取の人の聞き書きをしようと思ったことです。当時私は日赤の勤務

医だったんですけど、院長に1カ月休みが欲しいと言ったんです。「何すんの？」と。ちょっと聞き取りせないかんでー。院長は「えー。どっちがほんとのあんたの仕事やっ」て。両方大事だったんですよ。1カ月休みもらえたんです。それで島に渡るわけです。テープレコーダーまわして、よかったら話を聞かしてくださいませんか。聞くどの話も話も、まじいっ！ていうような話なんです。これは残さねばいけないと思いました。それを「隔離」という本にしてまとめさしてもらいました。私としては故郷ということをテーマにしたかったので、鳥取の人の話を栗生楽泉園（群馬県草津町）で聞き、多磨全生園（東京都東村山市）で聞き、駿河療養所（静岡県御殿場市）で聞き、愛生園で聞き、光明園で聞き、大島青松青松園（香川県高松市）で聞き、菊地恵楓園（熊本県合志市）で聞いたんです。

ノンと自由地区

その中にこういう人がおられました。愛生園に来たけども夫婦が2人で住めない。栗生の楽泉園には自由地区があるんでそこに行った。そこで2人が住んだわけです。するとご主人はハンセン病ですけど、奥さんは何でもありませんね。でも一緒に住めたんです。ハンセン病の分類は時代によって変わりましたが、昔は熱こぶが出てたりするのをL型。結節、末梢神経に変化が多いのをT型。境界型B型。結局奥さんの分類としてはらいではない「ノン」ていうハンセン病の分類に入れたんですね。当局としての工夫だなと思って、それはありがたいと思ったんです。もう一つ思ったことはこういうことでした。ここから私の頭の空転なんですけども。旦那さん亡くなる訳です。奥さんが残るわけです。奥さんはハンセン病でないわけです。でも、そこにいることを周囲の入所者の人たちは許容したんです。「奥さんあんたはもともと病気じゃないだろう。だったらこんなところにおったらあかん。出て行けえ」と追放しなかったんです。入所者の人は「ノン」を追放しなかった。これがやっぱり一つの大きな許容力ですよ。私たちは故郷から「1のベクトル」で患者を追放しました。でも、栗生楽泉園に、この病気のために追放されたであろう人たちは「ノン」という、分類に当たるその人を追放せずに同居したんです。ここに何か象徴的なものを感じましたね。奥さんの「ノン」という生き方っていうのも立派ですし、「ノン」を追放しなかった人たちがいるっていうことも立派だと思うんです。

医学部でしたから大学で皮膚科の授業があったんです。西占貢教授の最終授業。教授がこう言ったんですよ。「気の毒な思い、大変な生涯を生きた人たちがいる」。ハンセン病の人達のことです。「どうかその人たちのことを思い出してほしい。日本だけではない。もし力になれる時があれば、その人たちの力になってあげて欲しい」ってその先生は言ったんですよ。なかなかそういう味のあることを大学で聞くことはないんです。偉い先生だなとその時思いましたね。

話が飛びますけど、先ほど権さんは障害が進んで精神も混乱して精神病棟に入所するんです。もっと症状が進んでセンターに入るんです。両足は切断されていました。これは聞いた話です。ある夕方、センターの部屋に権さんがいないんです。当直の看護婦さんと外科病棟の看護婦さんが捜したそうです。すると海岸に権さんがおったそうです。「権さん！おったんか！」みたいな。「何してんのっ！」て言うと、「もうこんな身体の障害で、もう目も見えんし、足もあらへんし。もうこんなで生きとっても意味がない。もう死ぬしかない。死んだる！」。その時、現場ってそんなもんだなあと思うんですけど、外科病棟の婦長が言った言葉。「権ちゃん！甘えたらいけん！」。これは偉いですね。患者さんを職業者が叱るっていう。患者さんを叱るみたいなことだったらメディアではやられますよ。でもそうじゃないでしょう。そういう場面があるわけです。その時に、患者さんを堂々と叱るみたいなことがあったっていう時にフェアな人間関係がそこにあったと思いますね。権さんは障害が重くなっていくんですけども、あとで●●●婦長に言ったそうです。「今度、郵便貯金が満期になる。定期が100万円出る」って。「ワシとしては婦長さんと、外科の婦長さんとそれから前好きになってラブレターを出したりしたけど実らなんで新潟に帰った看護婦さんと4人で一緒に1泊温泉旅行したい。そのために貯めとった」ていうんです。「よし分かった。それは私が新潟にも連絡を取る」と婦長は答えた。実現したかどうか聞き忘れたんですけど、家族だなと思ったですね。家族を失った入所者の1

人である権さんは療養所の中で、新しい家族を作った、そんなこと教えられます。

一通の手紙が来ました。「あなたの『隔離』を読みました。その中に高校時代の短歌のことを書いてありましたけど、あの短歌を作った人は、松丘保養園に住んでいる滝田十和男さんです。その歌集を送ります」って言って、歌集が来たんです。「天河」っていう歌集でした。*「幼くて 癩病む謂れ 問ひ詰めて 母を泣かせし 夜の天の河」。ありました。そして他を読んでもこういうのもありました。

吾が病みに とほく死にたる 伯父を責め 狂ひし如き 母が幾夜^{いくよき}

吾が病みに・・・私の病気に、ですね。伯父さんがこの病気であったことが分かって、その伯父さんのせいだと母が狂ったように責めていたのを思い出す、という歌です。十和男さんは1924（大正13）年に生まれて、1937（昭和12）年に父と一緒に入園されて、1939（昭和14）年にお父さんが亡くなっています。1941（昭和16）年、社会復帰して一時外で働くんです。私はびっくりしましたね。高校時代、私の心に残ったその作者が分かった。松丘保養園にいた人でした。

※「歌集 天河」 滝田十和男著（昭和31年5月5日 全国国立療養所ハンゼン氏病患者協議会出版部発行）

療養所入所者の減少という現実

ある時、何げなく「菊池野」っていう菊地恵楓園が出している機関誌を読んですと、全国の入所者数は1,577名とありました。びっくりしました。そして、これは島田等さんが言っていた「2025年、私たちは消滅します」。あれ本当だ、と思ったんです。今いらっしゃるみんなの気持ちを聞かねばと思って、FIWC 関西委員会や各療養所入所者自治会の方の協力得てアンケートさせてもらったんです。あまり返ってこんかもしれんとも思ってましたが、みんなの協力が沢山あったおかげで493名の回答がありました。時々偽造捏造返事みたい



のもあったんですけども。その中で聞いたことは10のこと。勝手に書かせてもらって。良かったらどれか丸してくださいっていう形で。①差別許さない ②許します ③お母さん ④故郷に帰りたい ⑤あきらめている ⑥ありがとう ⑦さようなら ⑧ほげたくないな ⑨この病気のおかげもあります ⑩年にとって何が何だかわからない っていうのに回答してもらって。結果だけを言いますとですね、「①差別許せない」285人で58%。今もそう思っておられるということにドキッとしました。もう一つは、「⑥ありがとう」っていうもの。色々あったけども、みんなにありがとう。愛してもらったという意味です。これが213名、43%。その両方に丸した人が22% 112名。何を思ったかっていうと、許せないとありがとうが同居しているっていうことだったんです。

最近見たのが本年5月1日の全国入所者数。ちょうど2年前より300人減って1,277名。明らかに島田さんが言った「その日」っていうのは近いと思うんですね。

何ができるかっていうところを申し上げますと、さっき言った通りなんですけど、あの「2のベクトル」というものをどうやって作っていくか。大変政治的な問題もあるし、運動的な問題もある。片方でメディアの問題もあったり色々ありますけれども、私がちょっと思ったのがさっきの「優しい心」。子どものようなぶな素直な、そういう単純な優しいそんな気持ちっていうのが意外と一番根本ではないかと思ったんです。そこが「2のベクトル」の原動力になるに違いないと思ったんです。

登代さんの心と「2のベクトル」

アンケートの後、何ができるかちょっと考えた時にですね。全国で出ている機関誌を読むことかなと思ったんで、愛生、青松、高原、新生、始良野、甲田の裾。時々送ってもらって読むようにしてます。するとある時、甲田の裾、松丘保養園のを読んでますと再掲載というのに出会いました。そこに滝田十和男さんの「天虎組の仲間たち」という随想が載ってたんです。*あの滝田さんかなと思って読んでみたんです。滝田さんが16、17歳の1942（昭和17）年頃、自分は社会復帰した。ちょうど戦争中ですから軍事産業が盛んな時で、ある鉄工所で働いていたっていう頃です。仲間ができて5人ぐらい、仕事が済むと天井屋の天虎屋に食べに行った。月に1回だけは天井を食べるんだけど、他の日はうどんくらいで済ませた。ワイワイ言いながら話して、その天虎屋に登代さんと言う18歳の女の子がいて、みんなが好きになる訳ですね。仲間のうち1人がその登代さんを好きになって、みんながもてはやすんです。ある時、その彼に招集令状が来るんです。そして急に天虎屋で壮行会が行われるんです。「お前が帰って来るまで、登代ちゃん守っておくけえ！」って言いながら、グデングデンにみんなが酔って、そして送り出すんです。その1カ月後、滝田さんのハンセン病は再燃するんです。未納金があったのでそっと支払いに行くわけです。その時、登代さんにだけ言ったんですね。そう言う訳で僕は療養所に行くことになった。みんなに気がつかれんように昼間の列車に乗るわけです。するとプラットホームに登代さんが、弁当持ってやってきてくれたんですね。登代さん、弁当を渡すんです。それが天井か内容は書いてないんですけど、滝田十和男さんはジーンとくるわけです。1945（昭和20）年頃のことなんです。私の中に残った光景は、天虎屋の登代さんのあの心こそが、「2のベクトル」につながるのではないかと思ったんです。高校の授業で聞いた「幼くて 癩病む謂れ 問ひ詰めて 母を泣かせし 夜の天の河」から、私の中では53年が経ってました。

※松丘保養園の機関誌「甲田の裾」2017年2・3号（通刊693号）P17-P23

リレートーク



〔登壇者プロフィール〕

長島愛生園入所者自治会 事務局長 石田 雅男 氏

1936年（昭和11）年兵庫県明石市生まれ。1946（昭和21）年、10歳のときにハンセン病発病し、境港市より国立療養所長島愛生園へ入所。長島愛生園入所者自治会の活動を行い、邑久長島大橋架橋運動にも従事。1993年（平成5）年から2年間、全国ハンセン病療養所入所者協議会の中央執行委員として東京へ出向の後、愛生園自治会会長職等を歴任。また、語り部として日々多くの子どもたちに自らの体験談を話し、2005（平成17）年文芸社より「隔離という器の中で」を出版。同年自身のドキュメンタリー映画「ハンセン病、今を生きる」を公開。人権が尊重される社会の実現に寄与している。

邑久光明園入所者自治会 副会長 山本 英郎 氏

1940（昭和15）年生まれ。1960（昭和35）年、20歳の時にハンセン病を発病し京都大学で原田禹雄氏から告知を受ける。同年、邑久光明園に入所。1979（昭和54）年の自治会選挙で指名され、副会長に抜擢される。就任直後から架橋運動が進展をみせる中、大きな役割を果たす。邑久光明園入所者自治会会長を16期、副会長を9期務めている。



NPO法人むすびの家 副理事長 柳川 義雄 氏

1950（昭和25）年生まれ。1969（昭和44）年、大阪大学入学とともにフレンズ国際労働キャンプ FIWC 関西委員会に参画。交流の家を拠点に国内の療養所でのワークキャンプなどに参加。1973（昭和48）年韓国の定着村での日韓合同ワークキャンプ以降、フィリピンのタラ村、中国の回復村でのワークキャンプに参加。現在まで現役として韓国の定着村でのキャンプに参加し続けている。10年前より日韓中、他の国々の回復者の聞き書きを行い、今後ご出版予定。愛生園の画家の絵画保全のための活動も開始した。

瀬戸内市裳掛地区コミュニティ協議会 会長 服部 靖 氏

1942（昭和17）年生まれ。1961（昭和36）年に現在の備前信用金庫の前身、牛窓信用金庫に就職。就職1年目から虫明支店の新規開店に携わる。同金庫専務理事の後、2009（平成21）年に退任。2010（平成22）年4月、裳掛地区コミュニティ協議会会長に就任。現在、瀬戸内市移住交流協議会協議委員として裳掛地区への移住者の受け入れを積極的に促進する一方、NPO法人ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会の理事を務める。



岡山県立邑久高等学校3年 佐藤 朱里 さん

瀬戸内市にある唯一の普通科高校である邑久高等学校の地域のことを学ぶ授業「地域学」にて1年生の後半からハンセン病について学習中。自分のまちに療養所があるということだけでなく、長島愛生園にはかつて全国で唯一のハンセン病療養所内にある高校、邑久高校新良田教室があったことから、力を入れて学習している。

司会：国立療養所邑久光明園長 ^{あおき}青木 ^{よしのり}美憲 氏

1965（昭和40）年生まれ。医師臨床研修と大学院博士課程修了、邑久光明園、国立国際医療センター（ハンセン病プロジェクトでミャンマーへ派遣）、駿河療養所、大阪府保健所を経て2015（平成27）年より現職。



（司会：青木氏）

邑久光明園長の青木でございます。リレートークの司会を務めさせていただきます。本日は多数ご来場いただき、高いところからでございますが厚くお礼申し上げます。リレートーク開会にあたり開催の趣旨をご説明いたします。

長島愛生園と邑久光明園の入所者様の皆様の平均年齢は85歳を超えており、邑久長島大橋について直接お話を伺うことができるのはこの先、非常に困難になると予想されます。また、大橋架橋前から架橋を経て今日まで社会から療養所にかかわり続けてこられた方も、当然お年を召してこられています。そこで、邑久長島大橋という橋を通して、架橋前、架橋運動、そしてこの30年間に療養所にかかられた皆様の実体験を聞き、ハンセン病問題の解決を目指すべく私たちはどう変わるべきなのか。何を大切にすべきなのか。語り継ぐべきことは何なのか、を考えるリレートークを開催し、ハンセン病療養所の世界遺産登録運動へ生かす契機にしたいと考えます。

本日は時代順に、まず邑久長島大橋の架橋運動が本格化するより前の時代。次に、架橋運動の19年間。続けて架橋から今に至るこの30年間。そして、将来へという形で邑久長島大橋を中心として時代を進めて皆様からお話をいただきたいと思えます。

まずは、架橋運動が本格化する1970（昭和45）年より前の療養所内の生活と社会との関係について。当時はまだ邑久長島大橋はございませんでしたし、らい予防法も存在していた時代です。療養所と社会の物理的、心理的関係という視点でお話をいただければと思います。まず療養所入所者の視点から石田様、山本様お願いいたします。

（石田氏）

皆さん、こんにちは。私は長島愛生園に入りまして丸72年がたっております。この72年を振り返ってみますと、正直なところ辛いことの多い72年でございます。しかし、そうした中にも幾つか嬉しい出来事もございました。その一つとして、1958（昭和33）年に厚生省が軽快退所基準というものを発表しました。言い換えれば社会復帰への門戸が開けられた、とういうことになろうかと思えます。よって、各療養所が社会復帰に備えるといった形で私たちの長島愛生園も職業の指導ということで、自動車の講習や無線技術の取得などに熱心に取り組みました。私もそうしたいい動きに浴しまし、自動車の免許を取得することができました。閉鎖的な療養所の中に新しい風が吹きこんできました。療養所自体がとても活気にあふれておりました。

しかし一方、社会との関係ということになりますと旧態依然として、社会とのつながり、社会との交流、こうしたことは一向に変わることはございませんでした。なぜだろう。そう思った時に、やはり島の療養所ということがあります。島の周りは海です。この海の大きな壁に隔てられて社会との交流がままなりません。私たちと社会との関係ということにつきましては、まさに物理的にも心理的にも大きく影響していました。そこで、島に橋をかけようじゃないか、そういう機運が出てきたわけでございます。入所者の軽快退所と社会との交流に一層力を入れていくためには、社会とのかけ橋となる橋が必要だ。そういう動きが出始めたのです。

（山本氏）

1960（昭和35）年に私は光明園へ入所しておりますが、当時は社会の偏見、差別の強い時代でした。私は京大の皮膚科特別研究施設で病名の告知を受けました。らいだと。その後、京大で治療するか療養所に入るかという選択を言われます。経済的にゆとりのない状況でしたので、京大じゃなしに療養

所へ入ると。京大での治療は実費負担ですので、経済的にゆとりがないと治療できません。そういうことで呂久光明園に入所いたします。その頃は先ほど石田さんも言われましたけどまだまだ外との交流というのはほとんどない時代。ただ、私が入所した年にFIWC並びに、SCA、この二つの団体が園内でワークキャンプをやってくれます。SCAは教会関係の下でワークキャンプをやる。FIWCは柳川さん含めてほかの先輩たちが当園でワークキャンプやる。ほとんどレミ舗装。道づくり。私たちの生活というのはまだまだ大部屋の時代でした。15畳の部屋に6人か7人入っているような時代でしたが、その後大部屋がどんどん少なくなっていき、不自由者、不自由者ってというのはセンターのことですが、大部屋制度からセンターでの個室制度に変わっていくような時期でした。園内は活気がありました。

もう一つ、当園には瀬溝に渡しがあります。1969（昭和44）年頃に職員の登庁と退庁に合わせて、午前5時30分から夜は9時40分まで運行されていました。その頃には入所者がどんどん社会へ、外へ出て行くようになります。そのような中で入所者もようやくその渡しを使えるようになっていった。大変だったのは、台風や冬場の潮風が強くて波が高い時は渡し船が出せないという時です。そのような中で橋の問題は、必要性があるということで自治会の中から出てきました。最初は、瀬溝に横断歩道橋をかけようという計画です。2年間で工事費が少なくて済む。実現可能、ということになっていきます。その翌年、1970（昭和45）年には呂久光明園で全患協の定期支部長会議が開催され、席上、呂久光明園として長島架橋について提案します。各支部長から質疑応答の後、提案通り決定されます。これが長島架橋の始まりになります。翌年には呂久町と県議会に要請していきます。その中で、全患協より呂久光明園単独ではなくて呂久長島両園の意思統一が必要ではないか、との指摘があります。両園自治会で協議して、その2年後の1972（昭和47）年5月に両園自治会の長島架橋促進入園者委員会を結成します。委員会は厚生省、地元国会議員、県・町関係者に請願書を提出します。ここに、本格的に架橋運動が始まります。

（司会：青木氏）

次に、療養所の外の社会の視点から、地元裳掛地区にお住まいの服部様、お願いいたします。

（服部氏）

初めに、本日私がお話しする内容は文献や地域住民の方のお話、そして私が見聞きした体験に基づくものでございます。ご了解いただけますようお願いいたします。

1930（昭和5）年に長島愛生園が開設された当時、ハンセン病は感染力が強い不治の病、伝染するという恐ろしい病気とされていました。療養所の開設は極秘に進められ、光田健輔氏や内務省の役人は偽名を使い、宿泊も隣村とし、地域住民には悟られないよう現地調査を行い、内務省は長島を候補地として決定しました。その後、村長や村議会議員との交渉も二、三日で済ませ、住民への説明は何もなかったと聞いております。当時の住民はそんな恐ろしい病気の療養所が、なぜこの地にできるのかと非常に心配し日々不安な暮らしをしていたそうです。

私の幼いころには、島抜けをする入所者の方も多く、虫明に渡り乗り合いバスに忍び込み、運転手に見つけられ療養所に連れ戻されるという光景が今でも心に残っております。1970（昭和45）年頃までは、裳掛に住んでいるだけでハンセン病がうつるのではないかと。あるいは、療養所の職員の子どもであるという理由で、結婚が破談になる。婚約が解消されるということがありました。私たち地域住民も偏見や差別、風評被害を受けた被害者なのです。

私は、1961（昭和36）年に地元の金融機関に就職し、毎週2日愛生園へ職員の預金の勧誘に訪問しておりました。職員の勤務場所へ訪問する途中で、入所者の方と出会う機会が多くありました。後遺症として腕や指を失われた方、歩行困難な方、外傷のひどい方が多く行き交う中で、ハンセン病に対する恐怖心がなかったと言えは嘘になります。しかしながら、毎週訪問しているうちに、入所者の方との出会いもでき、預金の取引を依頼されるようになりました。当時は直接入所者のお宅を訪問することはできませんでした。分館、今の福祉課ですが、こちらの面会室でお話をしたりお金を預かったりします。預かったお金はクレゾール消毒をされ持ち帰るというルールがありまして、お金は消毒のにおいが眼を刺すぐらいまでに消毒されていました。当初、感じていたハンセン病に対する恐怖心に

については、入所者の方から病気に対する悩みや苦しみを聞くなどしているうちに、病気の知識が深まり、心も開き理解し合える人間関係ができました。治療薬の存在も、治る病気だということも知らされた。私は、幼少のころの不安は亡くなり、交流が深まっていきました。

一方、虫明は療養所ができたということで雇用の方ができ、職員 800 人が行きかう活気のある村となり、虫明港の周りには多くの商店が建ち並び、虫明銀座と言われるほどになりました。地域経済は潤っていました。

(司会：青木氏)

次に、NPO 法人むすびの家の柳川様にご発言いただきます。本日初めて、「交流の家」を耳にされた方もおられると思いますので、交流の家の説明も含めましてお願いいたします。



(柳川氏)

柳川です。本日は全部きちんと説明をしていると、2時間ぐ 現在の交流の家 (撮影：実行委員会事務局) らいはかかるような中身ですので書類を用意しました。皆さんのお手元の袋の中に A3 の大きな紙で字がいっぱい書いてある書類があると思います。それを見ながら写真を見ていただきたいと思います。また、参考文献というのも書いておきました。詳しいことをお知りになりたい方は、その参考文献を直接手に取っていただいて、読んでいただけたらと思います。ほとんど絶版になってますが、私どものところに連絡いただければ少しずつなら在庫があります。

今からご紹介する方々のほとんどの人たちが、もう亡くなっています。生きているのは書類の中で 1 人か 2 人ぐらい。そういう故人の人たちのつながりの中で、交流の中で色んな運動ができていたということをお示ししたいと思っております。

まず、詩人の大江満雄さんです。先ほど長島愛生園入所者の島田等さんという名前が徳永さんのお話にもありましたけれども、療養所の詩人の人たちとの交流を戦後すぐに始められた人です。深い交流を持ちながら「いのちの芽」という詩集を出しておられます。彼についての詳しいことは木村哲也著「癩者の憲章」という本があります。作者の木村さんも今日、この会場に来られています。ぜひ読んでください。

次に鶴見俊輔という人です。(写真①)この交流の家が建つ頃、彼は同志社大学の教授でした。大江満雄さんと鶴見さんは関係をお持ちで、鶴見さんは療養所の中の詩の選とかを通じて関わっていきます。



写真①

その中で、トロチェフさんという人が出てきます。白系ロシア人と言われて共産党系でない、逃げてきたロシア人ですね。彼はハンセン病を患い子どもの頃に草津の療養所に入りました。

1963 (昭和 38) 年のことです。東京の YMCA のホテルにトロチェフさんが泊まろうとしたんです。当時彼は厚生省が発行している回復証明書というのを持っていた。それを YMCA のホテルの人に持せて「回復してるから泊めてくれ」と。彼は率直でしたんで。だけど、手と顔に少し障害が残ってる



写真②

んで、YMCA のホテルが宿泊を拒否をしました。大哲学者の鶴見さんが駆けつけて交渉したんですけど、だめやったんですね。結局トロチェフさんは他のところに泊まったんですけど、この話を次の週か何かに鶴見俊輔さんが同志社の教室で話をしたんです。そしたらその中に、私たちのワークキャンプの先輩で柴地則之という男がいました。(写真②左) 彼がその鶴見さんの話を聞いて「そんな泊まれない人たちがいるのか」と。「じゃあ、おむすびでも食べながら誰でも泊まれる家を建設しよう」と提唱していきます。建設の当時、多分これ右側、愛生園の昔

の高島園長だと思んですけども、高島園長も応援に来て下さいました。(写真②右) この柴地さんは40代の後半に亡くなってしまっています。

「交流の家」の建設にあたり矢追日聖という宗教家が持つ土地を提供してもらえないか、と打診します。神道の宗教法人です。私たちFIWCは、フレンズ国際労働キャンプっていうんです。フレンズのFというのは、お友達じゃなくてフレンズ派というクエーカーと呼ばれているキリスト教の団体のFです。神道の村がキリスト教の名前を冠した団体を簡単に受け入れてくれる。凄くおおらかな村だったわけです。それがある程度分かって、柴地則之はそこへ行って「交流の家、だれでも泊まれる家を作るための土地を提供してください」と言う。矢追日聖は即座に「土地を使ってください」と答える。



写真③



写真④

交流の家建築の募金を集めるため、全国を回りました。ここに愛生園におられた鈴木重雄さんという人が登場してきます。一番左端に立っている人が鈴木重雄さんです。(写真③)彼はキャラバンにも参加し、募金活動にも参加しています。若い愛生園の回復者の人たちを交流の家の建設に連れてきました。彼らが実際に肉体労働をして、家を作ることに協力してくれました。(写真④)石田さんもやってくれたと思います。自分の病気を隠さないで社会復帰をした数少ない2人も含まれていました。

しばらくしたら、地元がものすごい反対運動を起こすんです。ムシロ旗を立てて100人ぐらい。最後は奈良市長まで反対しました。奈良市長が反対した時に矢追日聖さんは「これでこの家はできる」と思ったらしいんです。つまり反対運動も行き着くところまで行ってしまったと。そうこうしているうちに、市議会議員の有志たちが間に入って来て仲裁をしてくれて、4年後の1967(昭和42)年に名称を「らい回復者社会復帰セミナーセンター」という名前に変えて竣工いたしました。しかし社会復帰の拠点としてはほとんど使われなかったんですね。病名を明らかにしているようなところから社会復帰していったらバレてしまいますから。

交流の家が竣工してすぐくらいに、「『らい』を聴く夕べ」というのを開催しています。愛生園の青い鳥楽団を大阪の厚生会館に招待をしました。近藤宏一さんが左から2番目ぐらいに写っていると思います。(写真⑤)近藤さんは青い鳥楽団の楽長さんでした。

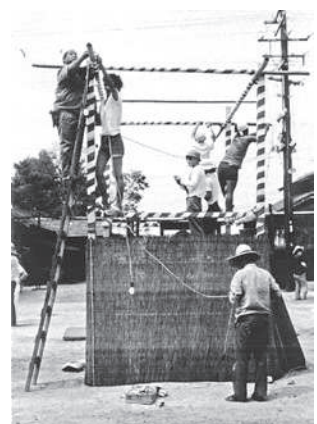


写真⑤

囲碁将棋大会というのも交流の家でやりました。さっきの徳永さんの話も出てきましたけども、色んな人を集めてきて。すごい熱戦ですね。さっきは徳永さんが何か患者さんの方がようけ勝ってたって言ってましたけど、実は違って学生の方が結構優秀だったんです。だから、何泊もしてますから1泊目で学生が有利になっているとその晩キャンパーがいっぱい集まってきて、酒飲まして、次の日フラフラにしといて、それで患者さんが勝ったというふうなことが多くありました。そういう時の写真です。(写真⑥)この会は20年目ぐらいに「もうここまで来る元気がないわ」ということで療養所の方からもう止めましよう、ということで20回で終わってま



写真⑥



写真⑦

お祭りもやりましたね。愛生園、光明園どちらでもやりました。盆踊りとかもやったその時、おそらく光明園の1回目の祭りの時にやぐらを組んでる様子です。(写真⑦)

光明園で道の舗装、レミファルトというのを対岸から船に載せて運んで来て、また船に上げて、それで道の舗装をするというワークキャンプもしました。もう、60年近く前の話です。こういう交流をしたメンバーたちは今に至っても個人的な交流をずっと続けています。愛生園の夏祭りでは「ちんどん隊」という形で病室に雰囲気をお伝えしてますし、光明園の夏祭りにも輪投げとかそういうなものを出して協力を今も続けています。

1973(昭和48)年、鈴木重雄さんが唐桑町(現在の宮城県気仙沼市)の町長選挙に立候補した時には私たちも5・6人応援に行きました。惜しくも200票ぐらいの差で負けてしまいました。もし勝ってたら、全国で初めて回復者の町長が誕生するというすごい画期的なことだったんですけど、本当に惜しかったんですけど負けてしまいました。

ここで、ちょっとおまけに徳永さんの若いころの姿です。中央右側のカバンを肩にかけているのが徳永さんです。(写真⑧)



写真⑧

話を戻しまして、オーチェチョンという牧師さんは韓国で定着村というのを作ってました。小鹿島とか色んな療養所で治った人たちが外へ出てきて、集団で村をつくって、その村で養鶏や養豚をやった。そういうところを定着村と呼んでるんですけども、それを100カ所ぐらい韓国につくりました。僕らはその中の大体20カ所ぐらいでワークキャンプをやりました。日本と韓国の学生と一緒に家庭訪問もしました。韓国では日本と違って、子どもを産んで育てて社会に送り出すという政策をとったわけです。

海外でのワークキャンプっていうのは、どんどん広がっています。中国の回復村では2001(平成13)年から原田燎太郎という男が現地に住みついて、現地の人と結婚して子どもをつくってます。中国には600ぐらい回復村があるんです。日本や韓国は国土が狭いので、辺鄙な所に回復村を作ったと言っても、時代が経過してくると回りが賑やかになってきますが中国は違うんですよ。国土が広い。雨降ったら行けないようなところに回復村を作って、もう、みんな捨てられたっていうふうな感じになってるんです。そういうところで現地の大学と結びつけて原田燎太郎という男が一生懸命やっています。



写真⑨

最後のおまけは、邑久長島大橋ができる前に運航されていた「森丸」という船です。全体を撮ったものはなかったのですが、ぜひ皆さんに「森丸」の写真をお見せしたいと思ひまして。学生服が私です。(写真⑨)

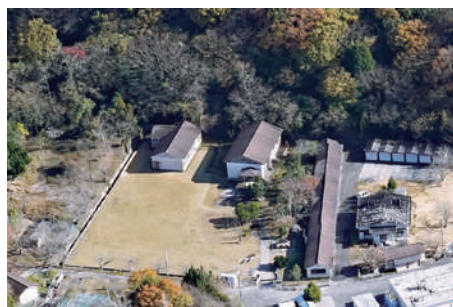
(司会：青木氏)

ありがとうございます。さて、この交流の家に愛生園の石田様は実際に宿泊されたご経験をお持ちだと伺っています。宿泊された当時の思いなどをお話いただければと思います。

(石田氏)

交流の家には2度ほどお世話になりました。その思いもひとしおのものがありますが、私にとりましてはそれよりも建設によく参加したことです。特に学生の皆さん方の夏休み、また冬休み。ロングキャンプということが持たれましたので、その時期に私も愛生園から3人ほど参加しまして、3、4泊しました。建設に汗を流すそうした体験、とてもいいものがございました。それにも増して私には昼

間は汗を流し、夜は学生の皆さん方とディスカッションということで、毎晩夜中の1時、2時頃まで話し合いました。特に学生の皆さん方が、私たちに気を使われまして、生きがいということについて色々意見交換をしました。そして交流の家が完成した後、どのように維持管理をしていくのか。また、「交流の家」に託した将来の夢とはどのようなものなのか。とても楽しい話し合いでございました。家の建設への参加ということでは得るものがたくさんございました。先ほど少しお名前が出ましたが、同志社大学の鶴見俊輔先生と夜中まで話し合いました。先生が「この交流の家が完成した時に、どういう方に管理をしてもらったらいいか。石田さんはどう考えていますか」と問われましたので、私は社会復帰している人たちに管理を任したらどうだろうかと思うのですが、と言いました。そして、社会復帰者が多いと言われた先生に対して私は、いや先生。本当の社会復帰者はほとんどいません。みんな我が身を隠して、偽って社会で生活をしている。本当の姿ではないんです。本当の社会復帰とは、その住んでいる地域の人たちに正しく理解され、受け入れられて初めて社会復帰じゃないかと私は思うんです、と申し上げました。そしたら鶴見先生は「うーん石田さん。変わった考えをお持ちですね」と言われた。でもその時、私は真剣に、本当に叶うものなら、私たちの病が癒えて社会で生活しているご夫婦の方がおられたら一番の適任だ、ということを申し上げたと思います。本当に今でも懐かしく思い出されます。



現在の新良田（撮影：写真家 島隆諦）

（司会：青木氏）

最後に、この時代に存在した邑久^{にいらだ}高校新良田教室について学習されている邑久高校の佐藤さんからご発言いただきます。

（佐藤さん）

皆さんは邑久高校新良田教室という高校をご存じでしょうか。新良田教室はハンセン病療養所内につくられた全国で唯一の小さな高校で、邑久高校の併設校でもあります。しかし、新良田高校での学校生活は私たちが想像もできないような生活でした。開校当時は強制隔離など謳ったらい予防法がまだあったので職員室には入室禁止でした。先生に用があるときは、職員室の外に設置されたベルを鳴らして先生を廊下に呼び出します。また先生は頭に予防帽子、白衣にズボン、長靴を履いて生徒に近づくことなく授業をされていたのです。先生たちは生徒が触れるものはプリントや教科書までもすべて消毒をしました。これらは、感染予防の仕組みでした。感染予防の仕組みでしたが、生徒たちに隔離される存在だということを強く意識させました。しかしその後、1970（昭和45）年頃には新しい治療薬が次々と出てきて、病気の正体も分かってきました。このころの在校生にはほとんど後遺症もなく、病気も完治していました。今日、この会場内にいらっしゃいますが、これは新良田教室で長年教鞭をとってこられた横田廣太郎先生が書かれた「ハンセン病の差別と人権」という本です。この本から当時の様子を学ぶことができました。実際にお話も伺いました。そして卒業生には医師や作家、検事や教師、看護師やデザイナーなど、多方面にわたって就職や進学をされています。この新良田教室は多くの生徒が社会復帰を目指し、社会へ出ていくための基礎や社会で生活し、働くための礎となり、ハンセン病に苦しむ多くの若者を救った、希望の光となった唯一の高校だったのです。

（司会：青木氏）

次に、時代を進めまして邑久長島大橋架橋運動についてご発言いただきたいと思います。まず、架橋の実現にご尽力されました山本様、お願いいたします。

（山本氏）

1976（昭和51）年、皆さんもご承知かもしれませんが、9月に台風17号が岡山地方に襲来します。瀬戸内地区に停滞し、数日間で960ミリと言われる雨量が計測されます。園内は停電し、断水となりました。光明園の最大の被害は場合は娯楽会館、ミシン場がグラウンドに崩落。道路があちこちで崩壊

するなど島は完全に孤立化していきます。このような被害を受け、外からの救援を受けられないような状況になります。どうしても橋が必要だということになり、架橋運動が活発化していきます。

1980（昭和 55）年、産婦人科病院に関する問題が発覚して、齋藤厚生大臣が責任をとって辞任されます。園田直先生が後任の厚生大臣に就任されます。当時は社会党の秋山長造先生が参議院副議長でしたが秋山先生と園田先生は党派を超えて、個人的に懇意であるということで架橋問題にお力添えをいただき、厚生大臣交渉がセットされます。1980（昭和 55）年 9 月 30 日、夕刻に両園自治会役員は決起集会を開き、虫明を午後 9 時に出発してバスで東京に向かいます。光明園からは 16 名、愛生園からは 27 名が参加します。翌 10 月 1 日、日比谷公園で全患協本部員と長島架橋要求中央交渉団を結成して衆参両院の国会議員へ請願活動を実施いたします。厚生省の玄関前に横断幕を張って、架橋早期実現のアピールを行います。決起集会を開いた後に園田厚生大臣に直接お会いするため大臣室に入ります。代表は 15 名でした。大臣室には報道関係者を多数招き入れて、カメラマンが一斉に写真撮影を終えた後、全員が退席します。

大臣交渉の回答といたしまして、「この橋は経済的、生活上の利便もあるがこの橋は隔離を必要としない証として実現したい。翌年度、1981（昭和 56）年度の予算で実施する」と回答いただきます。午後から奥村整備課長から説明を受けます。完全に公共事業方式から分離したのではないと。私たちは回答として分かりにくかったという印象を持っております。その後、県・町に対して、大臣交渉の報告がなされますが、町の了解できるような内容ではなく、地方医務局、県、町による三者協議会が開催されます。そのような中でも、ほとんど進展はありませんでした。

その翌年、両園自治会代表と架橋委員は 8 月、岡山会館で開かれた県政懇談会、これは自民党の先生方、衆参両院の先生方が帰ってこられた夏休みの間に行われます。県の要望事項をそこで要請されるというものです。その時、私たちも時間をいただきまして陳情に行きます。席上、出席議員より「特別交付税については無理がある。持ち帰って中央で建設、自治、厚生三者で話し合いをやり直す必要がある。今後は、橋下龍太郎代議士が中心となって、対策を考えることになった」という回答で最終的に締めくくられます。その後、10 月に架橋委員会と全患協本部員の陳情団 15 名は、先の大言明の実施を求めて地元負担金を厚生省が持つということ、予備調査費を出して誠意を示してほしいということで、5 時間に及ぶような交渉を行っております。

その後、橋本代議士から元浜貫一岡山県議会議員を通して東京で三者協を開き、入園者の代表を出席させると連絡が入りました。12 月 18 日、これは復活前です。衆議院第 2 議員会館第 3 会議室において会合がもたれます。

出席者といたしましては、地元橋本龍太郎先生、大村襄治先生、岡山県の元浜県議、大村環境保健福祉部長。邑久町からは木下邑久町長ほかでございます。

入園者代表といたしましては、高瀬重二郎愛生園自治会長。日野三郎架橋委員長。高杉晋光明園自治会長。その時に橋本先生より、「公共事業方式で色々やってきたが難しいので地元関係者が合意するならば、厚生省の直轄事業として架橋を実現する。1982（昭和 57）年度において、予備的な調査を着手する予算を確保するため、大蔵省及び厚生省に働きかける用意がある」との発言をなされます。それで最終的に復活で蓋を開けた段階では、全患協のほかの 11 園に対して了解を取るように、という提案があります。1982（昭和 57）年度の予算復活で予備調査費として、211 万 7,000 円が認められます。計画案といたしましては、3 年で調査を行うということで架橋運動は進展します。

1985（昭和 60）年 12 月、島内側で鉄入れ式を行い島内の橋脚が建設されます。翌年には対岸に橋脚が建設されます。1987（昭和 62）年 10 月 9 日にはライトグレーの橋桁が設置されました。その時にはもう既に明年度、1988（昭和 63）年 5 月 9 日に開通式を行うということが決まっておりました。橋下龍太郎先生の決断によって邑久長島大橋が架橋されることになりました。



(司会：青木氏)

続きまして石田様、お願いします。

(石田氏)

私がこの架橋運動に関わらせていただいたのは、たまたま自治会の役員を勤めておりました1972(昭和47)年のことです。この年から先ほど、山本さんがおっしゃったように、両園で架橋促進委員会が結成されました。更には、この年に架橋合同委員会ということで光明園の自治会、愛生園の自治会が一緒になって、架橋を運動に取り組もうという決意のもとに行動が始まりました。私は架橋委員ではございませんでしたけれども、自治会の役員という立場から初めから開通が実現するまで、色んな立場で関わってきました。先ほど山本さんがおっしゃったように、1番の大きな架橋運動の中で動きが出ましたのは、1980(昭和55)年、時の園田厚生大臣から素晴らしい言明をいただいた時です。「強制隔離をする必要のない証として、橋を架けましょう」と。これにはとても大きな衝撃、大きな喜びを噛みしめました。その後は色々と予算措置の面で問題がございましたが結果的にはそうしたことも解決し、1988(昭和63)年5月9日に開通しました。目の前に橋が物理的に存在したとき、本当に涙が出るほど興奮し喜びました。そして、その橋こそまさに人間回復の橋。橋の名は邑久長島大橋ですけれども、橋の精神は人間回復の橋だ。そうしたことを改めて自らに誓いました。そして、この橋をどのように活用していくのか。いよいよこれから私たちの責任に関わってくる。そうしたことも喜びとともに自覚をさせていただきました。

(司会：青木氏)

最後に、地元を裳掛地区の服部様には当時の地元の雰囲気につきまして分かる範囲でお話いただきたいと思います。と申しますのも、30年前といいますと服部様は信用金庫で働き盛りの時期だったと思いますので。

(服部氏)

当時のことをお話しさせていただく前に、ちょっとお断りをさせていただきます。先ほど私の発言中に当時の入所者の方との色んなお話、様々な出来事がありましたことが脳裏に浮かび、ちょっと、込み上げてくるものがありましたので取り乱すところがありました。お許してください。

架橋運動につきましては、地域住民は推進活動に参加したという方はいなかったと思います。しかし、架橋に係る用地買収には地権者の方や関係者の方が協力したと聞いております。愛生園では光田初代園長の後任の高島園長先生が着任され、1970(昭和45)年頃からは外出緩和などを示されました。入所者の方は島外へ出られる機会が増え、幾分自由に本土に渡られていたと記憶しております。確かに連絡船での移動という不便さにはありましたが、先ほど写真にも出てました森丸という連絡船で日生へ買い物に出たり、邑久までパチンコに出たり、不便な中にも娯楽を楽しまれる方もおられたように思います。よって、地域住民としましては架橋前のある程度自由に出入りされているとの認識もありましたので、架橋で往来が自由になるということに関して特別に関心を持っていた人は少なかった側面もあるんだろうと思います。ハンセン病への理解も幾分出てきておまして、入所者の方を特別視することもなくなっていたんではないかなと思います。

(司会：青木氏)

次に、架橋前後の様子とこの30年間についてお話をいただきたいと思います。石田様と山本様からは架橋前後の療養所内の高揚感、いよいよ橋がかかるという当時の雰囲気とこの30年間について。変化したこと変化していないこと。また変わるべきことや、変わってはいけないことをご発言いただければと思います。柳川様と服部様には、橋の存在が社会と療養所をどのようにつな



撮影：井上光彦氏

いだが、ハンセン病問題の解決に向けて橋にはどのような意味があるのか、などについてご発言いただきたいと思います。

(石田氏)

橋が架けられてからの入所者の思い。喜び。そうしたことの一端をお話ししたいと思います。橋が架けられて、こんにちまで30年が経過いたしました。30年経過いたしましても愛生園には現在、161名の入園者がおります。この中でいまだ橋を渡っていない人も何人かおります。ただ、素晴らしいことは物理的に橋がかかって、その橋を渡って喜びを実感する。大勢の方たちが橋を渡ってこられる。そういう人たちを目にして、本当に橋が架けられてよかったなど。そういう実感をしばしばいたしました。それよりも私がこの橋はすばらしい力を持っているなと思いましたのは、先ほど言いましたようにまだ渡られていない入園者が何人かいます。でも、橋を渡っていないけれども、心の中に、橋を架けている。そう思われるのは、とても考え方が前向きなのです。行動も前向きな行動をとっています。どんなに後遺症がひどくても、外から来られた方がお会いしたい。色々かつらい思いをした経験を語ってほしい。聞きたい。そういうことにも、積極的に対応されています。そうした光景を見るときに、ああ、この人たちは橋を見ることができない視覚障害者、歩くことができない身体障害者でも、その人それぞれが心に橋をかけて、人間らしく生きていこう。そういう姿勢を見るときに、とても考えさせられることは、確かに人間回復の橋、この言葉はとても重たいです。でも、17年間の架橋を運動の中に、私たちは「人間回復の橋をかけてください」、そのように叫んできました。それは言うまでもなく、人間回復に向けて心身ともに生きていくことが橋が求めているものではないだろうか。そう思ったときに決して橋を軽々には見えてはならない。むしろ、その橋の存在感、それに私たちも向き合って橋とともに生きていく。一心同体で療養生活を励んでいく。それが橋にとっても、喜んでくれているものではないだろうか。そういう思いが、30年経ちましても今までも私の心に残っております。そして、今でも、橋を鏡のようにして自分の生きざまということをよく考えさせられます。そうしたことで、この橋に対する感謝、これを忘れてはいけない、そのように思っています。

(山本氏)

橋が架かって30年のことを振り返りますと、橋が架かったことによって園内はやはり活気付きました。電動車いすの人たちも当時は多かったです。その人たちが、毎日のように大橋を見学して、下のほうを歩き来る船を眺めてそれを楽しんでおられた、と思います。

また、園の生活は一変します。社会と同じように車社会となりまして、毎日、岡山市内へ外出することも多くなったり、また車で1泊2泊の旅行に出かける人たちも多くなりました。もう今はそれほど元気はないかもしれませんが夕食を食べるために外出をして、個々に生活を楽しんでいるというような状況でした。ただ、私達にしてみると平穩に過ごせること、それは架橋運動によって成り立ったんだらうと思います。もう架橋運動のような長い運動はできないと思います。私達にはそんな時間がありません。これから本当にどういう形で、この橋を利用して過ごしていくのか。また多くの人たちに利用してもらえるのか、ということになってきます。だから、その私達はその橋に対して愛着を持ちながら過ごしていくということになると思います。そのような中ですが、架橋後の平成に入って私たちにとって大きな変革が起こります。架橋当時はらい予防法がありました。だけどらい予防法の改廃問題が浮上してきます。らい予防法廃止に反対する意見も多かったです。ただ全患協は、改廃、廃止やむなしということで動いていきます。廃止の担保するものは何なのか、ということで反対理由を言われます。東京の本部を歩き来して約1年以上になりますけど、ようやく話し合いの決着がついて廃止法案の意見がまとまります。平成8年の早々に、今でも覚えてるんですけど1月18日に菅厚生大臣と面談します。その時に予防法廃止法案を上程すると。年度末で廃止法案が通るだろうということで報告されます。その時には深刻な謝罪はありませんでした。ただ、ようやく1996(平成8)年の4月、私たちの長年の悲願であったらい予防法が廃止されます。

その後、らい予防法違憲国家賠償請求訴訟問題が出ます。原告になるか、ならないかということで色々噂話の流れたりします。2001(平成13)年5月11日に熊本地裁で第1次判決が出されます。

その判決では、控訴阻止をするかということで私たちは、全患協は全患協なりの中央行動を行います。原告また弁護士の方々、一団となって控訴阻止行動を行います。一般の方々も多くが賛同してくれるような形でこの問題は決着いたします。小泉政権において和解が成立。その後、原告でない人たちのハンセン病補償法が制定したことで、園内で色々意見が出ておりましたがこの問題は決着いたします。今は平穏な日々を過ごしています。廃止法と国賠訴訟問題が解決してからは多くの訪問者が来園されます。ハンセン病問題の啓発。偏見差別の解消。そのための勉強。多くの方が訪問されて、私たちと面談をいたします。ただ、入所者が超高齢化しているため訪問者への対応が行き届いてないのが現状です。私達もできるだけ、期待に沿うよう努力してまいりたいと思っております。

(柳川氏)

日本の社会が1番大きな罪を犯したのは、やはり療養所に皆さんを隔離して、そして社会全体がすっかり忘れてしまったことですね。かなり長い年月の間、マスコミも司法関係者も政府もそれを外に出そうという積極的な努力をほとんどやらなかった。だからずっと隠されてきた。さっき徳永さん言っていたベクトル2の動きを阻む1番大きなことだったと思うんです。

私は韓国に行きました。韓国に行きましたから、韓国の政策は療養所から治った人たちをどんどん社会に出していく。ただ、集団で出していたので「あの村は」という偏見とか差別は残りました。でも、彼らは子どもをつくって就職させて、そして社会復帰を子どもたちについてはさせていく。だから経済活動をするので、ほかの人たちとの交流がすごく増えていったと思うんです。だけど日本はその交流すら絶えさせてしまった。橋が架かったからといって、中の人たちがすごく感激はしたと思うんですけども、外の人にとって、あれは一体何だったんだろうという、橋かかっても余り関係なかったんじゃないかな、という感覚を僕は持っています。その後少しずつ、その交流が拡大してはいますけども、もうその交流をしようという相手の方々が高齢でお相手してもらえない。亡くなられていく状況になった時に、ベクトル2を生み出すっていうのは本当に凄い大変なことだ、ということをおもっています。

(服部氏)

架橋により長島と本土の往来が自由になりました。民間の特別養護老人ホームも光明園の敷地内に建設されました。一般住民の長島への訪問が増え、四季折々のイベントも多数参加し、年々交流が活発になっているように思います。その反面、毎日、毎朝、療養所へ通う職員が虫明地区立ち寄る必要がなくなりました。商店街は衰退の一途をたどり、まちの活気やにぎわいはなくなりました。職員が利用していた駐車場、車庫も廃止・廃業となりまして、裳掛地区の経済面のみで見ますとマイナスとなっているのが現状ではないでしょうか。

(司会：青木氏)

リレートークも終盤となりました。最後に、ご登壇者様と徳永先生から一言ずつ、邑久長島大橋を絡めてハンセン病問題の解決に向けて、皆様が今後どのような取り組みをなされたいかについてご発言をいただければと思います。世界遺産登録運動についても言及していただきますと幸いです。

(石田氏)

これから橋を含めてどのような療養所を作っていくのか。療養所の将来はどうなっていくのか、ということについて少し考えを述べさせていただきたいと思っております。

今、私たちの愛生園には161名の入所者がおり、平均年齢が間もなく86歳になろうとしています。言ってみれば、残された命の時間というのはそんなにございませぬ。30年前に橋が架けられた時の愛生園の入所者の数は約800です。10周年記念を迎えたときには約400でした。30年経って600人の入園者が亡くなりました。現在、大変寂しい状態に置かれていますけれども、ここでも大きな救い、私たちの寂しさを補ってくれるものが邑久長島大橋なんです。なぜかと申しますと、入所者の数は年々減っていきませんが、その橋を渡ってこられる来訪者はすさまじい勢いで数を増しております。現在、

年間1万2,000人を超えております。私たち入所者の数は寂しい状況にありますけれども、一般社会の方から多くの人たちが来てくれます。

入所者と社会から来られた人々が色んな面でふれあい、交流を深めていく。そうしたことはとてもありがたいし、やはりこれも橋のおかげだな、そう思います。そして、今、世界遺産登録を目指す運動に入ったばかりです。私たちはそんなにこれから先、生きていく時間はございません。でも、そうした中で世界遺産登録を目指していくといった素晴らしい動きが出てきたということは私たちにとりましても喜ばしいことです。実現の日は遠いかもしれません。でも私たちは生きていく上で療養所の世界遺産登録を目指す。そうした中に自分たちは今置かれているんだ。そう思ったときに、とても生きがいを覚え、1日1日を大切にしないといけない。やがてはこの長島が美しい長島であり、しかし、その美しい長島の中に忌まわしい悲惨な歴史も刻まれているんだ。これをうまく融合させまして、人権の島、長島。そういう存在に持っていったときに、この邑久長島大橋は人間回復の橋であると同時に、人権の大橋、そうした形で、ゆくゆく世界遺産登録にされて、多くの人たちが訪ねてきてくれる。入所者は1人もいなくなっても、長島の存在は永遠に社会の人たちに愛され、そして人権が尊重されていく、という気持ちを新たに多くの人たちが抱いてくれる。それがまさに世界遺産登録を願う私たちの心ではないかな、と思っています。どうもありがとうございました。

(山本氏)

邑久光明園は来年創立110周年を迎えます。全国5施設がこのような状況にあります。それぞれが式典等を検討中であります。過去の療養所の歴史を振り返り今後の療養所をどうするのか。何度も考えたことではありますが、施設の永久保存計画。建物の保存をするだけでなく行政が行った強制隔離政策の施策を後世に残す資料づくりが必要ではないでしょうか。また、人権啓発、人権の研修の場として地域をはじめとして、多くの方々の交流を深めて施設を利用していただく。そのような形で施設を保存していきたいということが私たちの願いであります。そのためには、地方自治体が参画できるように、これは予算面を含めて国が支出できるようなシステムを作らなければ困難だと思います。ただ地方自治体にポンッと渡すだけで、お金は出しませんよということでは地方自治体は受け取ってくれないでしょうから、これらのことを国の政策として注視し、要求していく必要があるのではないだろうか。そうしないと安心して自治会組織を幕引きできないと思います。今日のシンポジウムが世界遺産登録への援助となればと願っております。ありがとうございました。

(服部氏)

私は世界遺産に向けての運動で、施設の保存や差別、人権問題の啓発、こういうことは重要だと思います。しかしながら、長島の島全体の活用について将来構想をしっかり議論し、国、県、市を巻き込んだ島の活用プランを準備する必要があると思います。そうでなければ、ただ世界遺産だけで長島が守れるとは思いません。せっかく皆さん方が苦勞して、橋を架けたあの人間回復の橋が、無用の長物になることを私は恐れます。また、入所者の方々はもちろんですが地域の住民が受けた偏見差別に関する風評被害について、過去の事実と向かい合い、調査し、このような悲劇が二度と起こらないよう後世に伝えていきたいと思います。社会全体がハンセン病は迷惑な病気だ、患者を隔離してしまえ、というような空気を作りそれが圧力となって、患者さんや回復者を社会から遠ざけてきたこの環境を理解し、ハンセン病に対する知識を深め、ハンセン病は完治する。恐ろしい病気ではないぞ、ということを啓発し回復者が社会復帰できる環境に変えていかなければならないと思います。過去の事実は事実として受けとめ、回復者の方が社会復帰できる世の中にしたいと感じております。ありがとうございました。

(柳川氏)

この病気の問題は、今現在の社会の中にある学校のいじめの問題とかなり深く地下水位でつながっていると思うんです。だから、そのつながっている部分をちゃんと明らかにして少しでもそういうものがないような社会をつくっていく必要があると思います。今、私たちは聞き書きの活動というのをやっ

てます。2009（平成 21）年からワークキャンプでかかわった日本、韓国、中国、インドネシア、ベトナム、インド、フィリピンなどの村の人たちの歴史を日本語に翻訳して、それを 1 冊の本にして並べてみたいと思ってるんですが、国が違うと何でこんなに違うのかということがそれを一目でわかるようにしたいなと思ってます。それともう一つ、今は愛生園の画家の方の絵の保存を何とかしたいなというふうに思っています。ぜひ、世界遺産が実現するようなことがあったら、その人たちの絵がその場所にある程度、飾られるということが、素晴らしいことなんじゃないかなと思います。また協力をお願いしたいと思います。ありがとうございました。



（徳永氏）

私が発言するような場所じゃないですが。先ほど山本さんや石田さんがおっしゃってくださった当事者の気持ち。さすがだと思います。山本さんが言った「国は最終的な責任をちゃんと取るべきだ。地方自体に渡す場合でも」というのも心に残ります。石田さんの「橋と自分が一心同体で橋が鏡だ」なんて発言も凄いですね。「橋のために自分は生きているという、橋に見られてる」という点、お見事でした。そんなふうな熱い思いを多くの方が持っておられるんだと思って、改めてそんな大事な橋だったかと思ったんです。私が思いましたのは、石田さんも、山本さんも近々お亡くなりになるでしょう。愛生園も光明園も入所者の方がいなくなる。その時のことなんですね。それで私が思ったのはやっぱり納骨堂です。全国にある納骨は、なくなることはないんです。もうみんな死者ですよ。ハンセン病の元患者の方たちは。その死後を考えねばいけない。で、あるのは納骨堂だと思ったんですね。納骨堂の明りを消さないためにはどうしたらいいか。私は納骨堂の明りを消さないのは何をすればいいかっていうようなことが大事な問題だと思うんですね。入所者の方がゼロになって、日本のそういうハンセン病を患った人はゼロであると。その後をどうするかなんです。世界遺産という方法は一つありますけど、私は、誰かが墓守ですね。納骨堂の明かりを必ず灯していくっていう、そういう国民的仕事がある。「納骨堂のあかりは社会の灯台」と昨日思い付いたのです。

（司会：青木氏）

では最後に邑久高校の佐藤さん、これからどのような取り組みをしてみたいでしょうか。

（佐藤さん）

私はハンセン病療養所である長島愛生園と邑久光明園を訪問しました。当時のままの状態が残っている建物や監禁室、そして納骨堂などさまざまな施設を見学しました。それぞれの場所に残る雰囲気を感じました。今、世界遺産登録に向けて準備をしていますが、私たち高校生や若い世代はハンセン病のことを知っている人はわずかです。また、瀬戸内市民としてハンセン病をなかったことにする訳にはいきません。現在、ハンセン病の語り部は少なくなっています。これからも減り続け、いずれは 1 人もいなくなる時がきます。だからこそ私たち若い世代は、ハンセン病の事実を語り継ぐ必要があります。後輩たちは、今年、出版されたばかりの「麦ばあの島」という漫画を導入の教材として読み、そこに描かれた当時の様子を感覚的にですが体験することから学習を始めています。また、今年



の 8 月 1 日の朝日新聞の大阪本社版では第 1 面に「隔離、高校野球したかった。ハンセン病療養所から遠征」と題された新良田教室の先輩の記事が掲載されました。記事では甲子園を目指すことさえできず、観戦することもかなわなかった当時の野球部員のコメントが紹介されています。このように新良田教室の辛かった記憶を今に伝えています。私たちは語り部には、なれませんが、語り継ぐ伝承者として、「未来につなげたい、大切な記憶」という世界遺産登

録を目指すNPO法人のキャッチフレーズのように、今まで学んだことや療養者に訪問して肌で感じたことを若い世代に伝えていきたいと思います。ありがとうございました。

(司会：青木氏)

皆様、本当にありがとうございました。ここで皆様にお詫びせねばなりません。進行の不手際で時間が押しております都合上、この後予定しておりましたご質問を受けることができません。大変申し訳ございません。

今日のリレートーク登壇者の皆様からは本当に良いお話を伺ったと思います。本土と隔てられて作られた、長島愛生園、邑久光明園。長島というのは強制隔離の象徴だった。それに対して、入所者を中心に行われた架橋運動は、人間回復の象徴と言って良いと思います。また、お話の中でありましたように隔離政策の被害者は、入所者の皆さんはもちろんですが、地元の住民の皆様も被害者であった、ということは忘れてはいけないうちだろうと思います。そして、入所者の皆様の闘いによるこの人間回復の闘い、これには地元の住民の皆さんも含めまして大勢の方々が参加してきたということも、これは私たちも大事にしていかななくてはいけないと思います。更に、これを支えたのは、やはり人と人との、心のつながり。まさに心と心のかけ橋。これがあって、入所者の皆様と住民の皆様、市民の皆様とのつながりがあって、今日があると思います。架橋の意義、そしてその精神に学んで、まだまだ残されている課題の解決、そして歴史を語り継ぐことの大事さを学んで私たち市民がそれぞれの立場で取り組んでいくということが今後、求められているように思います。

以上でリレートークを終了したいと思います。ご登壇の皆様にご感謝の意を込めまして、いま一度盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

閉会挨拶

(総合司会)

青木先生、長時間にわたる司会進行、ありがとうございました。

以上で本日のシンポジウムのプログラムは全て終了しました。閉会の挨拶を執行委員会副委員長 邑久光明園社会交流会館 学芸員 おた ゆかり 太田由加利 が申し上げます。

(太田執行委員会副委員長閉会挨拶)

本日は、お足元の悪い中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。また、お話をしてくださいました皆さん、お疲れさまでした。徳永先生の話とリレートークとを聞かれました、会場の皆さん、どんな思いが沸いてきたのでしょうか。その思いを胸に、長島の療養所にまた足を運んでいただければと思います。お待ちしております。

また、私たちハンセン病療養所は世界遺産への道を一方踏み出しました。皆様の温かく力強いサポートが必要です。ご協力よろしく願いいたします。

最後に、「麦ばあの島」*の麦ばあの言葉をお伝えして終わりにしたいと思います。

万能な人はおらんさかいな。人は必ず間違える。
何かしたことで間違え、何もせんかったことで間違え、知らんかったり、
できひんかったことで間違え、取り返しのつかへんこともあるけど、
謝るだけが償いやない。
いつもどこにいても、思うことならできる。
1番ひどい仕打ちは忘れてしまうことや！
忘れんといてな！



本日は誠にありがとうございました。これにて閉会いたします。

(総合司会)

以上で邑久長島大橋架橋 30 周年記念シンポジウムを終了いたします。またの機会に皆様方とお会いできること楽しみにしております。本日は誠にありがとうございました。

※「麦ばあの島」1～4 古林海月著（すいれん舎）

NPO法人ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会 キャッチフレーズ及びロゴマークの発表・表彰

キャッチフレーズ応募総数（国内外）	451 作品
ロゴマーク応募総数（国内外）	114 作品

【キャッチフレーズ作者 和田 裕史（コピーライター）】

この度「未来につなげたい、大切な記憶」で賞をいただき、とてもありがたく思っています。このキャッチフレーズのコネクトは、悲しい過去とか苦しい過去があったかと思いますが、それら記憶を自分たちが忘れることなくどう未来へつなげ、前向きで明るい未来に如何につなげていけるかという思いです。このキャッチフレーズが、少しでも世界遺産登録推進に向けて力になってくれれば良いと思っています。本日はありがとうございました。



【ロゴマーク作者 大森 剛（デザイナー）】

今回は採用していただいただけでなく、このような授賞式をご用意していただいたことに心より感謝申し上げます。このロゴを作ったきっかけは NPO 法人のウェブサイトでもロゴを今募集していますという記事を拝見しまして、私は旧邑久町出身の人間なんですけども、ご縁を感じまして応募させていただきました。30 年前に目に見える橋がかかったのと同じぐらい、これからは目に見えない橋を未来や世界に架けることができたらいいなどの思いを込めて作りました。皆さんのご

活躍心よりお祈り申し上げます。今後ともよろしく願いいたします。



(中央) 原 憲一 NPO 法人理事長



(左) 武久顕也 瀬戸内市長

邑久長島大橋架橋 30 周年記念シンポジウム
「人間回復」の思いを未来に - 過去、現在そして世界遺産へ - 報告書

発行日 2019 (平成 31) 年 2 月 20 日

編集・発行 岡山県瀬戸内市

邑久長島大橋架橋 30 周年記念事業実行委員会

(実行委員会事務局 NPO 法人ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会事務局)

〒701-4501 岡山県瀬戸内市邑久町虫明 6253 番地

国立療養所邑久光明園旧入所者自治会館内

TEL. 0869-24-8872 / FAX. 0869-24-8873

URL. <https://www.hansen-wh.jp>



撮影 西岳海氏 ※別途記載のあるものを除く。

©2019 NPO法人ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会

このシンポジウムは(福)ふれあい福祉協会「平成30年度ハンセン病対策促進事業」の助成を受けて実施しました。